

千手院前遺跡

—宅地分譲地開発に伴う発掘調査報告書—

千手院前遺跡

二〇一七年三月

朝日商事有限公司・甲州市教育委員会・公益財団法人 山梨文化財研究所

2017年3月

朝日商事有限公司
甲州市教育委員会
公益財団法人 山梨文化財研究所

千手院前遺跡

—宅地分譲地開発に伴う発掘調査報告書—

2017年3月

朝日商事有限公司
甲州市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

序

本書は甲州市塩山上塩後に所在する千手院前遺跡の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査は朝日商事有限会社による宅地分譲に伴うもので、試掘調査の結果、遺構の分布が認められた範囲を対象に進入路建設部分の記録保存を目的として実施されました。

調査の結果、縄文時代の前期から後期までの遺物が見つかっており、この周辺に縄文時代の集落が存在する可能性の高いことがわかりました。また、古代から中世にかけての条里地割の一部と考えられる溝遺構が発見され、その頃にはこの地が田畠として開発され、人々の暮らしを支える役割を果たしていたことが伺えます。

このような調査成果は当市の文化財保護に深い理解をお示しいただきました朝日商事有限会社ならびに多くの方々のご協力を賜って成し得たことであり、深く感謝申し上げます。

本書が甲州市内における埋蔵文化財発掘の記録として、歴史研究の一助となれば幸甚です。

平成29年3月31日

甲州市教育委員会

教育長 保坂 一仁

例

- 本書は平成28年度（2106年）に発掘調査を行った、山梨県甲州市塙山上塙後731に所在する千手院前遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は朝日商事有限公司による宅地分譲に伴うもので、甲州市教育委員会の試掘調査結果をもとに、本調査を公益財團法人山梨文化財研究所が実施した。
- 本書の原稿執筆、編集は鶴原功一が行った。
- 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は株式会社テクノ・プランニングに委託した。

凡

- 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標系第8系(原点：北緯 36度 00分 00秒)、東経 (138度 30分 00秒)に基づく座標数値である（世界測地系 JGD2011）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北で、真北方向角は-0° 07' 33.45''である。
- 方位および遺物の縮尺は次のとおりである。

土坑・ピット	1 : 30
全体図	1 : 160
土器・石器	1 : 3
鉄製品	1 : 2
黒曜石剥片	2 : 3

言

- 本書に関わる出土品、記録類は甲州市教育委員会で保管している。
- 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。
入江俊行・飯島泉・柳通めぐみ（甲州市教育委員会）、河西学、望月秀和（公益財團法人山梨文化財研究所）、森谷忠・柴田直樹（テクノ・プランニング株式会社）、三枝哲雄（三枝興業）

例

- 平面図における遺物の種別は以下のとおりである。

■ 瓷器	△ 石製品	▲ 土器
◊ 金属製品	★ 土製品	
- 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
- 平面図における遺物番号は、遺物図版、遺物観察表と一致する。
- 本書の図1は国土地理院発行1/200000 地勢図、図2は同1/25000 地形図、図3は甲州市発行1/5000 都市計画図を使用した。

本文目次

第1章 経過	1	第1回 平面図	9
第1節 調査の経過	1	第2回 1～7号土坑	10
第2節 発掘作業の経過	2	第3回 8号土坑、1～4・9号ピット	11
第3節 整理等作業の経過	2	第4回 6・7号ピット	12
第2章 遺跡の位置と環境	2	第5回 1～6号溝	13
第1節 地理的環境	2	第6回 遺物	14
第2節 歴史的環境	2		
第3章 調査の方法と成果	5		
第1節 調査の方法	5		
第2節 層序	5		
第3節 遺構と遺物	5		
第5章 総括	8		
報告書抄録			
奥付			

図版目次

写真図版目次	
図版1	1 東よりみた遺跡全景 2 真上からの俯瞰写真
図版2	1 作業風景 2 3～5号溝と周辺
	3 中央付近の土坑群 4 5・6号土坑付近
	5・7・8号土坑付近 6 1・2号溝(西より)
	7 完掘状況(東より)
	8 國化用写真撮影のためのポール撮影
図版3	1 1号ピット 2 1・2号ピット 3 3号ピット
	4 1～3号ピット 5 4号ピット
	6 5～7号ピット 7 5号ピット 8 6号ピット
図版4	1 7号ピット 2 1号土坑 3 2号土坑
	4 3号土坑・8号ピット 5 4号土坑
	6 5号土坑 7 6号土坑 8 7号土坑
図版5	1 8号土坑 2 6号溝 3 6号溝の断面
	4 6号溝内出土刀子 5 深掘地点の断面
	6 調査風景 7 作業風景 8 重機による埋戻し
図版6	出土遺物

挿図目次

図1 遺跡の位置	2
図2 周辺遺跡分布図	3
図3 調査区の位置	4

表目次

表1 周辺の遺跡	3
表2 土器観察表	7
表3 石器観察表	8
表4 土製品観察表	8
表5 金属製品観察表	8

第1章 経過

第1節 調査の経過

本調査地点は甲州市塙山上塙後731に位置する。甲州市塙山の市街地西側に位置し、ブドウ・モモや野菜を主とする果樹・畑作地帯で、甲州市街地を向嶽寺方向に迂回して北上するバイパス開通により、道路周辺は徐々に宅地開発が進みつつある。

平成27年10月、朝日商事有限会社による宅地造成及び福祉施設建設設計画にもとづき、甲州市教育委員会文化財課が試掘調査を実施したところ、溝状遺構、ピットが確認され、縄文土器片が出土したため、市教育委員会では進入路部分に関して本調査が必要と判断した。朝日商事有限会社では公益財團法人山梨文化財研究所に埋蔵文化財調査を依頼し、平成28年2月に委託契約を締結、2月26日に文化財保護法第92条にもとづき山梨県教育委員会に発掘届を提出、3月26日に山梨県教育委員会より発掘調査についての通知を受理し、平成28年4月1日～4月8日に本調査が実施された。本調査にあたっては朝日商事有限会社、甲州市教育委員会、公益財團法人山梨文化財研究所の3者間で三者協定を締結し、甲州市教育委員会の指導、監督のもとで調査を実施することとなった。調査範囲は試掘調査で遺跡の存在が推定された範囲のうち、進入路に相当する238.7m²である。

なお、平成27年10月に行われた甲州市教育委員会による試掘報告は以下のとおり。

「千手院前遺跡試掘調査報告」

所在地 甲州市塙山上塙後字稻荷林729外5筆

調査面積 約156m²

調査期間 平成27年10月21日～23日

調査原因 宅地造成・福祉施設建設

調査概要

（1）調査の目的と方法

調査地点は、塙山の市街地を南流する塙川と、山梨市を南流する笛吹川との間に位置し、南側がわずかに低くなる微傾斜地形となっている。当地は埋蔵文化財包蔵地「千手院前遺跡」の範囲に含まれており、工事の計画範囲内に遺跡の有無を確認するため、試掘調査を実施することとなった。

調査は、重機によって表土掘削を行った後、人力で遺構確認作業を行い、測量・写真撮影等の記録作業を実施した。

（2）調査の成果

試掘トレンチはA～Hの8ヶ所を設定して調査を行った。配置は「トレンチ配置図」の通り。なお、A・B・C・D・G・Hトレンチは宅地造成が予定される地点に設定したもので、E・Fトレンチは福祉施設建設予定地に設定したものである。

Aトレンチ 約17.5×1.7mで設定し、地表から約50cmで地山と考えられる明褐色土層を検出し遺構確認作業を行ったが、遺構は無く、現代の搅乱のみ検出した。

Bトレンチ 約9.7×1.6mで設定し、地表から約30cm掘り下げたところでコンクリート片など現代のゴミを含む大規模な搅乱層を検出した。搅乱層の主体は礫で、近接地点で地表下1.4mまで掘り下げたが、搅乱はそれより下にまだ続いていることが分かった。

Cトレンチ 約10.2×1.5mで設定し、地表から30～40cm掘り下げたところで地山と考えられる明褐色土層を検出したが遺構は確認されなかった。西側は一部Bトレンチで確認した搅乱の延長部分がみられた。

Dトレンチ 約9.5×1.8mで設定し、地表から約40cm掘り下げたところで地山と考えられる明褐色土層を検出したが遺構は確認されなかった。

Eトレンチ 約18.4×1.5mで設定し、地表から約40～50cm掘り下げたところで地山と考えられる明褐色土層を検出し、遺構確認を行ったところ、溝状遺構1、ピット（小穴）1を検出した。遺物は縄文土器片を確認している。

Fトレンチ 約18×1.4mで設定し、地表から約50cm掘り下げたところで地山と考えられる明褐色土層を検出したが、遺構は確認されなかった。

Gトレンチ 約11.7×1.4mで設定し、地表から約40cm掘り下げたところで地山と考えられる明褐色土層を検出したが遺構は確認されなかった。

Hトレンチ 約10×1.4mで設定し、地表から約30cm掘り下げたところで地山と考えられる明褐色土層を検出したが遺構は確認されなかった。

（3）まとめ

調査の結果、福祉施設建設予定地であるEトレンチから縄文時代のものと考えられる遺構遺物が検出されており、建設に際しては事前に遺跡の本調査が必要となるため、文化財課との協議を行うようお願いしたい。またA～Dトレンチ、G・Hトレンチは進入路部分が本調査の可能性があったが、遺構・遺物が検出されなかっただため、本調査の必要性はないと判断される。ただし、個々に住宅を建てる際や擁壁を入れる等の際には、その都度届出が必要となるため注意されたい。

第2節 発掘作業の経過

- 2016年4月1日(金) 晴 調査着手。ビニール緞で調査範囲を示し、重機による表土剥ぎを開始。
- 4月2日(土) 晴 重機稼働。
- 4月4日(月) 雨のち曇 重機稼働。
- 4月5日(火) 曇 本日より発掘調査開始。器材搬入。壁精査後、遺構確認面精査。基準点設置。掘乱溝2条を確認し、掘り下げ開始。
- 4月6日(水) 晴 遺構調査。
- 4月7日(木) 雨 作業中止。
- 4月8日(金) 曇 1～5号溝掘り下げ。1～3号ピット完掘。1・2号溝断面作図。遺構外遺物の取り上げ。

【調査参加者】

岩崎誠至・河西元彦・河西町男・普沼芳治・筒井聰・出井光・渡辺智之

第3節 整理等作業の経過

発掘調査終了後、平成29年3月を目指として文化財研究所内において整理作業を開始した。出土遺物の洗浄、記録、接合、実測、図面の整理を行い、パソコンにて遺構・遺物図版を作成した。全体図は空中写真より作図し、個々の遺構平面図は全体図より抽出し、断面図と合成した。現場での遺物取り上げデータと重ね合せ、遺物出土状況を確認し、平面・断面投影を行った。

【整理参加者】

柿原ゆかり・林紀子・藤原五月・古郡明

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡は山梨県甲州市塩山上塩後地内に位置する。甲府盆地北東部の笛吹川左岸の扇状地面上、標高397mの南向きほぼ平坦な緩斜面に立地し、調査地点は旧塩山市街地の郊外のモモ等の畠地内にある。

本調査は宅地開発予定地内に計画された進入路建設にともなうものである。宅地開発は東側に位置する南北方向の道路から西向きに進入路を設定し、その両側に宅地を開発するというもので、進入路部分について実施された甲州市教育委員会による試掘結果をもとに、教育委員会が決定した本調査を必要とする範囲、約200mについて発掘調査が行われることになった。調査地点の西側には、南北方向のバイパス沿いに東山梨郡合同庁舎があり、その西側に甲州市と山梨市の境がある。調査地点南側にはJR中央線が通り、東側には旧塩山市街地、北東には塩之山があり、宅地にはふさわしい閑静な地域である。

第2節 歴史的環境

遺跡は山梨市との境に近い位置にあり、北側には塩ノ山および向嶽寺が約600m離れて存在するほか、笛吹川に近い西側の山梨市下井尻方面にかけてはいくつかの居館遺跡が知られている。本遺跡周辺での包蔵地としては、図2中の2(清水尻遺跡)、3(宮之前遺跡)、27(高林遺跡)など、小規模が遺跡が分布するものの大規模な遺跡はほとんどなく、遺跡分布自体が少ないうえ、本調査の事例もほとんど行われていない。これは本地域が笛吹川の本流まで1.5kmとやや距離があり、水流に乏しいことから、地盤的に安定した地域ではあ



図1 遺跡の位置

るものの先史時代の集落立地としては条件が十分ではなかったことが考えられる。西側のバイパス建設時に埋蔵文化財に関する目立った調査は実施されておらず、またその後の葬祭場等の建設時には試掘調査が実

施されているが、諸磯式土器片が出土したのみで、堅穴住居跡などは見つかっていないことであり、中世以降は用水路の整備が進むなど耕作地や集落域として開発が進んだ地域といえる。

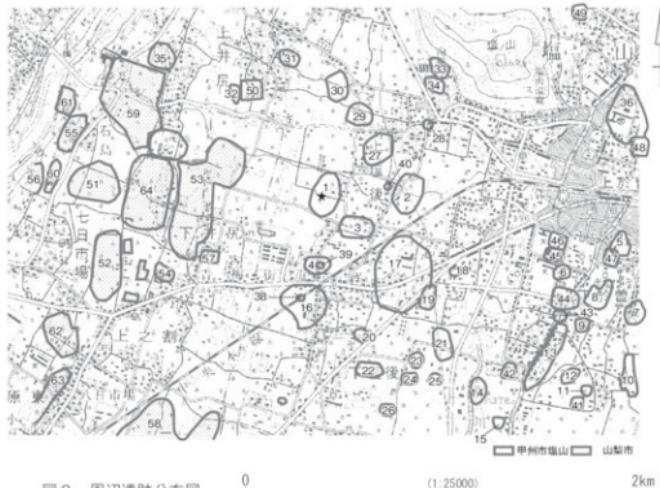


図2 周辺遺跡分布図

表1 周辺の遺跡

甲州市塙山			山梨市		
No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	千手院前遺跡		26	向原遺跡	奈良・平安
2	清水尻遺跡	縄文・古墳・平安	27	高林遺跡	縄文(中)・中世
3	宮之前遺跡		28	塙山前遺跡	縄文
4	稲荷林遺跡		29	金山遺跡	平安・中～近世
5	於曾屋敷遺跡	平安・中世	30	青木沢遺跡	
6	宇賀屋敷遺跡	奈良・平安・中世	31	番匠屋敷遺跡	
7	天神原遺跡	縄文(中)・平安	32	三上狐神遺跡	
8	林際遺跡	縄文・平安・中世	33	向獄寺庭園	近世
9	受地遺跡	平安	34	向獄寺大方丈跡	近世
10	影井遺跡	縄文(中)・平安	35	乙川戸前遺跡	縄文・平安
11	檜遺跡	縄文	36	梅ノ木遺跡	
12	正泉B遺跡		37	斐切塚	中世・近世
13	正泉A遺跡	古墳・平安	38	おせん稲荷塚	
14	下於曾八反田遺跡	平安	39	おまん稲荷塚	
15	楓畠B遺跡	古墳・奈良・平安	40	鉢の宮塚	
16	上塙後境遺跡		41	中村氏屋敷	
17	知光田遺跡		42	風間氏屋敷	
18	道替遺跡	弥生(後)～古墳	43	依田宮内佐衛門屋敷	
19	清水田遺跡		44	田辺氏屋敷	中世
20	薬師平遺跡		45	池田氏屋敷	中世
21	町田遺跡	縄文	46	宇賀屋敷	
22	十王前遺跡	平安	47	於曾屋敷	
23	扇田C遺跡	縄文・奈良・平安	48	橋爪氏屋敷	
24	扇田B遺跡	奈良・平安	49	村田氏屋敷	中世
25	扇田A遺跡	縄文(中)	50	古屋氏屋敷	

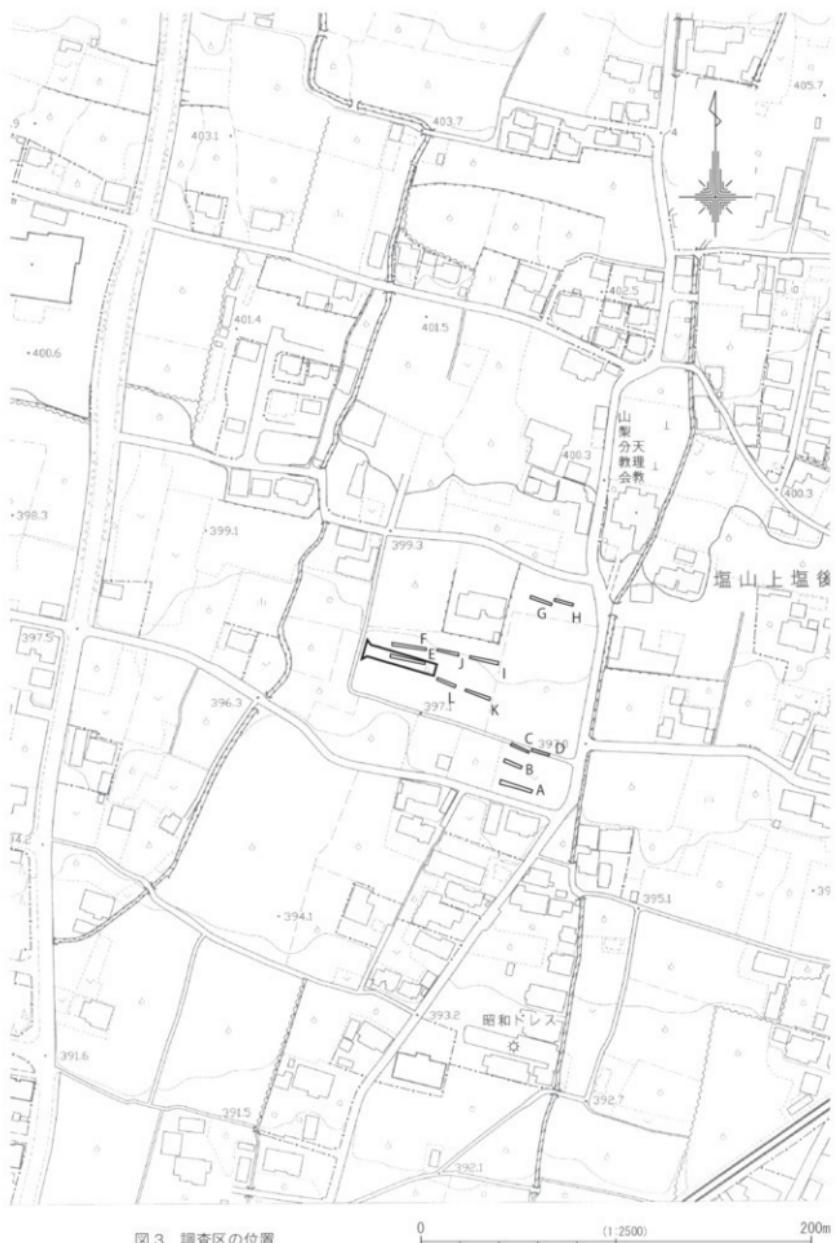


図3 調査区の位置

0 (1:2500) 200m

遺跡名の「千手院」について『甲斐国志』巻七十五
寺部第三には次のようにある。

「一白華山千手院 上塙後村 塩山向岳寺ノ末除地二
段五畝十八歩間創詳ナラズ中興室翁和尚 本山塔頭帰
軒ノ住持ナリ 文正元年示寂ス」

千手院は現在所在しないが、『甲斐国志』の記録に
より文正元年（1466）に示寂した室扇和尚を中興とする
向岳寺の末寺であることがわかる。遺跡付近にあつた中世の寺院とみられるが、現在、遺跡北側に天理教
山梨分教会があり、東側には鈴ノ宮がある。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区設定後、重機による表土剥ぎを実施し、遺構確認作業および各遺構の調査を行った。遺物の取り上げは光波測量機及び遺跡調査ソフト「遺構くん」を用いて出土地点を測量した。各遺構は断面図を作成したち完掘し、調査完了後にポール撮影により空撮写真から平面図化を行った。またドローンによる俯瞰写真を撮影している。調査後、埋戻し作業を行い、現状復旧を行った。

第2節 層序

基本層序確認のため、調査区北東隅（4・5号溝北側）に 2.6×1.2 m の深掘りを入れ、土層堆積状況を確認した。また調査区壁にかかるようにして検出された4号ピット、8号土坑および6号溝では断面図を地表面より作図し、土層堆積状況を確認している。

北東隅の土層は溝や攪乱状のピットが重複するため、土層確認の場所としては適当とはいがたいが、1～7層を確認した。1層（暗褐色土）は表土・耕作土で、2～5層（暗褐色土・鈍い黄褐色土）が溝、ピットの覆土となる。7層はいわゆるローム層で礫層を含み、6層はその漸移層で、5層と7層の中間的な色調となる。

4号ピット、8号土坑、6号溝では、若干の違いが見られるが、黒褐色土なし暗褐色土の表土（耕作土）下に鈍い黄褐色土なし暗褐色土があり、その直下が遺構確認面となる。遺構はローム層中に存在するが、間隔を挟む地点があり、黒褐色土・鈍い黄褐色土などの層が追加されている。

第3節 遺構と遺物

東西37.6m、南北62mの東西に長い調査区内は、西側1/3程度の範囲が礫の露出した礫層面である。調査区南壁寄りには調査区の向きとはば合うようにして平行した2本の溝（1・2号溝）があり、中央東寄りに南北溝（6号溝）が斜めに交差する。また東壁寄りには3本の溝がある。6号溝周辺に土坑、ピットが

まとまり、また西壁寄りには土坑等の落ち込みがある。遺物の出土量は遺構内外ともに少ない。

（1）遺構（第2～5図）

1号土坑（第2図）

6号溝の東側、1号溝に接する円形土坑で、直径1.08×0.8m、深さ0.54mの円筒形で、断面は桶型を呈する。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主とする。

2号土坑（第2図）

調査区中央北壁寄りにあり、直径1.25×1.1m、深さ0.4mの断面タライ状を呈した梢円形に近い円形土坑。覆土は暗褐色土を主とし下層に黒褐色土が堆積する。

3号土坑（第2図）

調査区中央、2号土坑の南東にあり、直径0.92×1.02m、深さ0.32cmの断面タライ状を呈した円形土坑。中央底面には長さ34cmの礫が1個存在する。

4号土坑（第2図）

調査区中央、2号土坑の東側にあり、直径0.87m、深さ0.2mの断面皿状を呈した円形土坑。覆土は暗褐色土を主とする。

5号土坑（第2図）

調査区西側、1号溝と重複する直径1.15×1.0m、深さ0.76mの円筒形を呈した円形土坑で、覆土は暗褐色土を主とし、覆土中位に3個の円礫が存在する。溝との切り合いは断面図からは判読できないが、溝が新しいとみられる。

6号土坑（第2図）

調査区西側、北壁にかかるようにして検出されたもので、礫層中に掘り込まれた直径1.06m、深さ0.22mの断面皿状の円形土坑であり、覆土は黒褐色土で、壁際には暗褐色土が堆積する。土坑とするには不明瞭であった。

7号土坑（第2図）

調査区西壁寄りの礫層面にあり、直径1.4×1.05m、深さ0.28mの断面タライ状を呈した梢円形に近い円形土坑。覆土は黒褐色土、黒褐色砂質土を主とし、礫が土坑内にも存在する。

8号土坑（第3図）

調査区西壁にかかるようにして縦層面に検出された。地表下0.43mに確認面がある。東西20m、南北1.85m、深さ0.4mの不整形土坑で、断面はポール状である。覆土は上から暗褐色土、鈍い黄褐色土、黒褐色土からなり、覆土中にも多数のやや大きな礫が存在した。

1号ピット（第3図）

直径0.78×0.72m、深さ0.15mの断面皿状の円形ピットで、覆土は黒褐色土と鈍い黄褐色土からなる。

2号ピット（第3図）

直径0.6m、深さ0.17mの断面皿状の円形ピットで、覆土は黒褐色土を主とする。

3号ピット（第3図）

直径0.6×0.52m、深さ0.1mのごく浅い断面皿状の円形ピットで、覆土は黒褐色土を主とする。

4号ピット（第3図）

調査区南壁にかかるピットで、直径0.3m、深さは断面によれば0.28m。地表下0.5mに確認面があり、断面図では地山を掘り抜いているが、3層（黒褐色土）以下のラインが本来のピット底面、5層上面が掘り込み面（本来の造構確認面）である。

5号ピット（第4図）

6号ピットと接する1.4×0.8m、深さ0.5mの不整形ピットで、中央には直径0.5×0.35m、深さ0.5mの深い部分がある。覆土は黒褐色土、暗褐色土からなる。

6号ピット（第4図）

5・7号ピットと接する直径1.05×0.9m、深さ0.12mの円形土坑で、断面形はごく浅い皿状を呈す。覆土は暗褐色土、鈍い黄褐色土である。

7号ピット（第4図）

6号ピットと接する。1.0×0.8m、深さ0.3mの不整形ピットで、暗褐色土を覆土とする。

8号ピット（第2図）

3号土坑の西側に重複するピットで、直径0.5m、深さ0.22mの円形で、断面ポール状。覆土は黒褐色土を主とする。

9号ピット（第3図）

1号溝と一部重複した長さ0.93×0.5m、深さ0.24mの楕円形ピット。断面形はポール状で、覆土は黒褐色土、暗褐色土を主とする。

1号溝（第5図）

調査区南壁際に、調査区壁と平行するように検出された長さ33.8m、幅0.5~1.0m、深さ0.3mの直線的な東西溝で、両端は調査区外にかかるため、さらに

長くのびる。溝の方向はE-23°-Wを示している。南側に0.8m置いて2号溝が平行する。6号溝、5号土坑、5号ピットと重複し、6号溝を切る点は明らかで、土坑、ピットとの前後関係についてもそれらを切るとみられる。覆土は暗褐色土を主とし、断面形はポール状である。覆土中からは縄文土器片などが出土しているが、古代以降の溝である。

2号溝（第5図）

調査区南壁にかかるようにして検出された長さ16m、幅0.4~1.0m、深さ0.2mの東西溝で、北側に1号溝が平行する。この溝の東端は調査区壁にかかり、西端は調査区西壁の手前、2mで止まっている。主軸方向は1号溝と同じである。覆土は暗褐色土、黒褐色土からなり、断面形はカップ状を呈す。1号溝とほぼ同形態で同じ程度の深さといえる。

3~5号溝（第5図）

調査区東壁寄りに3本が平行するように検出された。1本1本が明確な溝ではなく、一部一体化して広がっている。溝というよりは、畑の畝溝状の類か。その北壁を断ち割った深掘地點の断面に溝のセクションが現れているが、3号溝の覆土が2・3層（暗褐色土・鈍い黄褐色土）、4号溝の覆土が5層（暗褐色土）、5号溝の覆土が4層（暗褐色土）に対応し、4・5号溝間では4号が新しい。つまりそれらの溝には時期差を認める事ができる。溝の規模は3号溝が長さ6.0m（深掘りで掘り下げた部分も加えた長さ）、深さ0.3m、4号溝が長さ6.0m、深さ0.1m、5号溝が長さ3.8m、深さ0.45mで、4号溝が最も深くなっている。断面形はいずれもU字形である。それらの主軸方向はN-23°-Eで、1号溝とほぼ直交する。両者の関係は不明確で、同時期かどうかとも不明ではあるが、ともに条里地割にともなう区画の可能性を想定しておきたい。

6号溝（第5図）

1号溝と重複するように検出された溝で、長さ6.6m、幅1.2~1.8m、深さ0.4~0.5mの直線的な溝で、断面はポール状となる。主軸方向はN-35°-Eを示す南北溝だが、1号溝とは106°の角度で交差し、直交していない。時期を示す遺物を欠くが、刀子が出土していることから、奈良・平安時代の条里地割に関連した溝ではないかと考える。

(2) 遺物（第6図）

3号土坑（1）

1は諸磯b式。縄文地文上に半截竹管による横線、弧線状の沈線文をもつ。

5号ビット（2・3）

2は諸磯b式の縄文地文上に横位の半截竹管沈線文をもつもの。3は縄文地文の土器。

6号ビット（4）

4は諸磯b式の無節縄文の地文上に半截竹管沈線文を横位施文したもの。

7号ビット（5・6）

5は縄文地文上に半截竹管沈線文をもつ諸磯b式。6は中空の土製品で円錐形と推定されるもので、土偶胴部片とみられる。外面には棒状工具による沈線文を施文する。

1号溝（7～11）

7は外面のヘラ調整が粗い無文土器口縁部で、後期深鉢の可能性がある。8は縄文のみの胴部、9は縄文地文に半截竹管文施文をした諸磯b式の胴部、10は無文の胴部片。11は無文土器を整形した土製円板。

6号溝（12～16）

12は縄文地文に半截竹管文を施文した深鉢底部付近。13は縄文のみの胴部片で、ともに諸磯b式。14は肥厚帯口縁部の曾利Ⅲ式。15は条痕文土器で、弥生前～中期とみられる。16は鉄製刀子。長さ15cm、刃部長8.8cm、刃部幅2.3cm、柄部幅1.7cmで、先端を欠く。本来は長さ20cm程度あったとみられることから小刀あるいは短刀で、非常に脆い。

遺構外（17～38）

17～28は諸磯式、29～33は曾利式、34・35は堀之内式、36～38は石器。

17～19は口縁部が強く屈曲内湾した深鉢形土器口縁部で、縄文地文上に半截竹管文で平行沈線文を施文する。20は半截竹管文で横位羽状もしくは斜行文を施文した口縁部。21～23は縄文地文上に細い半截竹管文による沈線文をもつ胴部片。24は縄文地文の複合口縁土器。25は粗大な縄文を施文した胴部。26・27は縄文地文のみの胴部。28は諸磯c式とみられる縦位半截竹管文を平行させたもので、地文は無文のままでする。29は縄文地文のうち2本平行の粘土紐を貼付した胴部で、曾利Ⅱ式。30はナデ隆線の外側に放射状に沈線文をと文として施文した曾利Ⅲ～IV式の胴部片。31はナデをもつ低隆帶の区画内を櫛歯状沈線文施した曾利Ⅲ～IV式の胴部。32は低隆帶による区画内に半截竹管文で縦位施文した曾利Ⅳ式の鉢形土器。33は縦位条線文をもち、頭部に蛇行隆線文の変形である交互刺突隆線文をもつ曾利Ⅲ式の胴部。34・35は棒状工具で沈線文を施文した堀之内式。36は長さ12cmの打斧。37は長さ12.4cmの磨石で、磨り面は表面の1面のみ。38は調整痕をもつ黒曜石の剥片で、先端が尖り、石錐または石錐未成品のように両面加工されている

表2 土器観察表

図 No.	地点	種類	基理	時期	口／底／高	残%	塑型技法(外/内/底)	色調(外/内)	地土	集成	記述	備考
5-1	土偶	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截竹管+ナデ+	暗赤, 小丸	泥, 灰	12		
5-2	諸磯c	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截竹管+ナデ+	灰, 黑, 暗	泥	No.66		
5-3	諸磯c	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截竹管+ナデ+	灰, 黑, 行き止, 細	泥	No.65		
5-4	6ビット	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截竹管+ナデ+	灰, 行き止, 細, 石	泥	No.64	内部薄く黒變	
5-5	7ビット	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截竹管+ナデ+	灰, 行き止, 細, 石	泥	No.63		
5-7	1腰	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	ナデ+ナデ+	灰, 黑, 暗	泥	No.36		
5-8	1腰	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	ナデ+ナデ+	灰, 黑, 暗	泥	No.35	断面黒變	
5-9	1腰	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截RL, 竹管+底み, 頭み/-	小丸	泥, 行き止, 頭み	10		
5-10	1腰	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	ナデ+ナデ+	小丸, 灰, 行き止, 石	泥, 不良	No.56		
5-12	6腰	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截RL, 竹管+ナデ+	小丸	泥, 行き止	No.62	内部薄く変色	
5-13	6腰	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截RL, ナデ+	小丸	泥, 行き止	No.61		
5-14	6腰	縄文	深鉢	曾利Ⅲ	-/-/-	10	ナデ+後赤+ナデ+	泥, 行き止, 角	泥	No.65		
5-15	6腰	先端	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截+ナデ+	泥, 行き止	泥	No.64		
5-17	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截RL, 竹管+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.74	波状口縁	
5-18	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截RL, 竹管+ナデ+頭底直	泥, 行, 角	泥	No.20	波状口縁	
5-19	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	縄文+竹管+ナデ+	泥, 行, 行き止, 黑	泥	No.20	内部薄く変色, 波状口縁	
5-20	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	竹管+ナデ+	泥, 行, 角, 大丸	泥	No.3	内部薄く黒變	
5-21	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	海部RLR, 竹管+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.15		
5-22	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截+竹管+ナデ+	泥, 行, 角, 細	泥	No.39		
5-23	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	縄文+竹管+ナデ+	泥, 行, 帽	泥	No.19	内部薄く変色	
5-24	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截+竹管+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.31		
5-25	諸磯外	縄文	深鉢	先期?	-/-/-	10	ナデ+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.28	内部黒變	
5-26	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	多溝文RL, ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.58		
5-27	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	多溝文RL, ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.29		
5-28	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	竹管+ナデ+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.39	外面薄く変色	
5-29	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	半截RL+粘土ぬ+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.24	外面黒變	
5-30	諸磯外	縄文	深鉢	曾利Ⅱ	-/-/-	10	竹管+ナデ+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.27		
5-31	諸磯外	縄文	深鉢	曾利Ⅱ	-/-/-	10	多溝+後赤+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.26		
5-32	諸磯外	縄文	深鉢	曾利Ⅱ	-/-/-	10	後赤+竹管+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.73	外面薄く黒變	
5-33	諸磯外	縄文	深鉢	曾利Ⅱ	-/-/-	10	竹管+後赤+前突+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.48		
5-34	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	ナデ+後赤+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.2	外面黒變	
5-35	諸磯外	縄文	深鉢	諸磯b	-/-/-	10	後赤+ナデ+	泥, 行, 角	泥	No.69		

表3 石器観察表

図	No.	地点	分類	長／幅／厚cm	g	石材	色調	注記	備考
3	36	遺構外	打斧	12.6/4.5/1.4	93	ホルンブレス	灰オーブ	No.43	
3	37	遺構外	墻石	12.5/7.4/3.6	768	花崗岩	灰黄	No.32	
3	38	遺構外	剥片拂	2.6/1.4/0.8	2	花崗岩	灰	No.34	

表4 土製品観察表

図	地点	No.	種別	時期	長／幅／厚cm	整形方法(外・内・底)	色調(外・内)	胎土	焼成	重さg	残存%	注記	備考
3	2号	6	上鍋	中期Ⅲ	1.7/0.6/0.5	ノーマル	明灰	砂・瓦	良	17.5	100	T1c-N32	
3	1層	11	上鍋	晩天	4.6/1.6/1.3	ナマ・ナマ	明灰	砂・瓦・角	良	25.7	100	1層	周縁削り削利

表5 金属製品観察表

図	地点	No.	種別	材質	長cm	幅cm	厚2cm	重2g	注記	備考
3	丸溝	16	刀子	鉄	15.2	3.1	0.2	24.8	6.08%60	

第4章 総 括

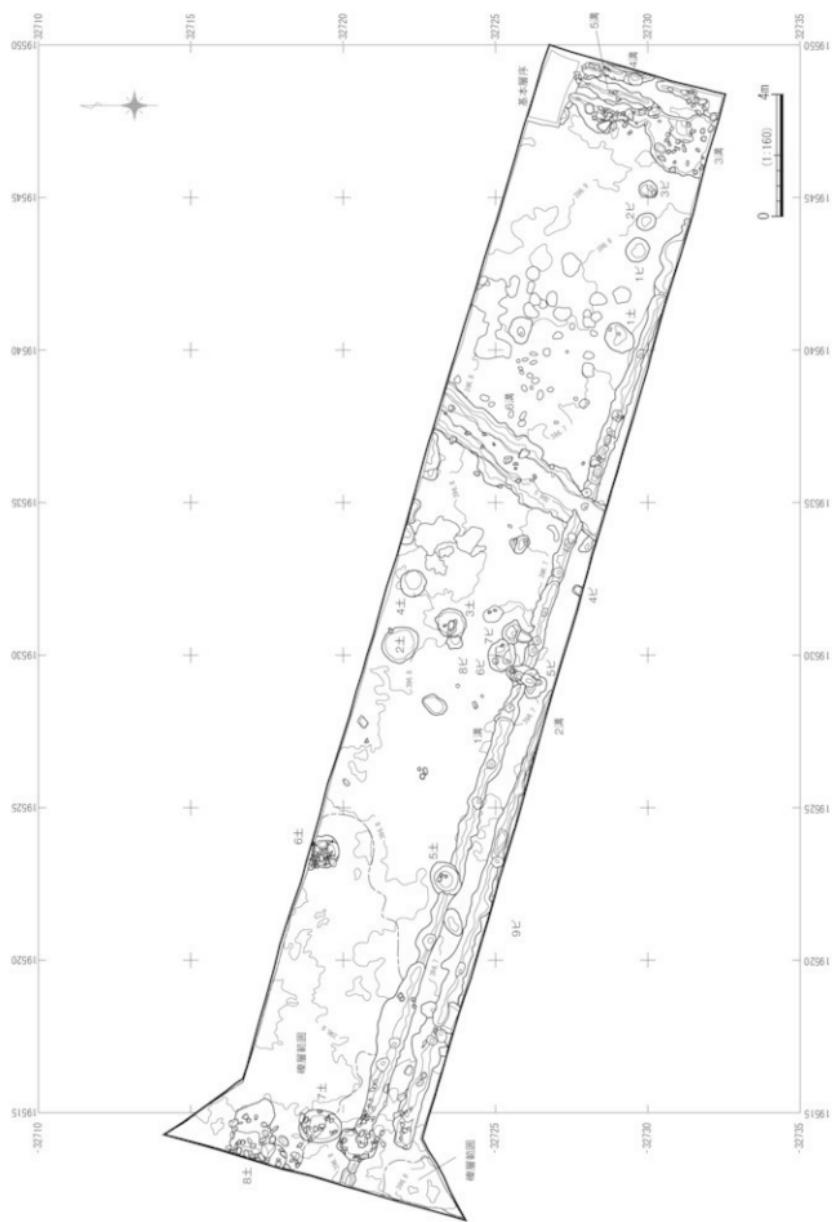
本遺跡は、出土遺物全般をみると古い順に繩文時代前期の諸磯b・c式土器、中期後半の曾利Ⅱ～Ⅳ式、後期堀之内1式期、弥生前～中期の条痕土器がある。それらにともなう遺構は明確ではなく、いくつかの土坑、ピットが該当する可能性があるが、周辺にそうした集落が存在したことを示唆する資料といえる。3号土坑から出土した土器片をもって、土坑の時期を諸磯b式期と決定することは難があるが、調査区中央付近に円形土坑が数基まとめて存在する状況は、諸磯b式期にともなう土坑群の様相として捉えることも可能である。その場合、周間に堅穴住居からなる集落を想定したいところではあるが、必ずしも堅穴住居ではなくても土器や石器を用いた居住痕跡があった場合があり、土坑群や遺物の存在をもって何らかの土地利用が行われた証左としておきたい。今後、周囲での開発のさいには、そうした時期の集落遺構の存在を念頭において確認調査にあたることが必要であろう。

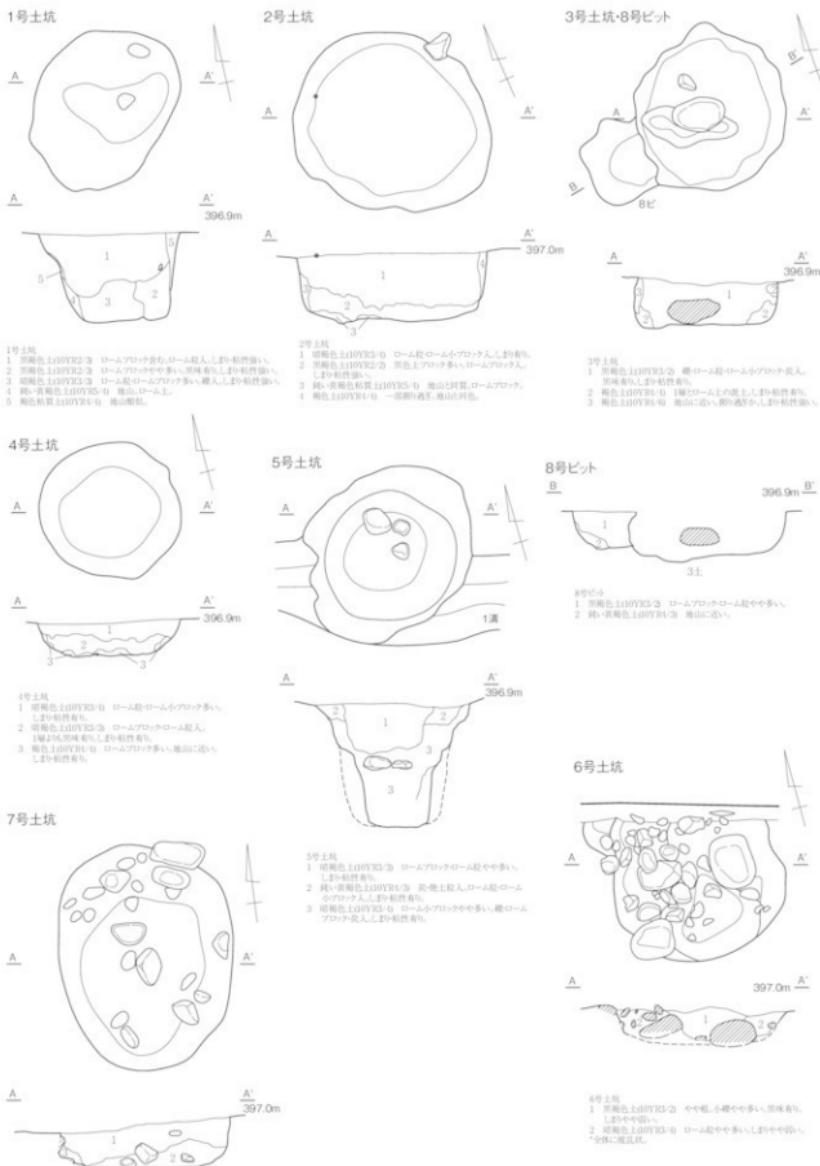
本遺跡では特徴的な遺構として条里地割に関わる可能性のある溝が検出された。1～5号溝がそれであり、中でも1・2号溝は0.8mの間隔で直線的に平行している。また6号溝もその可能性があろう。本地域周辺には峠東条里ともいわれる表層条里の地割が残る地域であり、それらの形成過程を検討するうえで遺跡調査によって得られたデータは貴重な資料といえる。条里にともなう溝の成立については古代から中世にかけてその契機が考えられるところであり、出土遺物をもって時期決定をすべきところであるが、今回は残念ながら出土していない。また2本平行する溝に関しては、区画側溝としての道路の可能性があるが、今後、地籍図中にこれらの溝を位置づけたうえで、その成立時期について再検討する必要があろう。

【参考文献】

『甲斐国志』

圖 1 平面圖

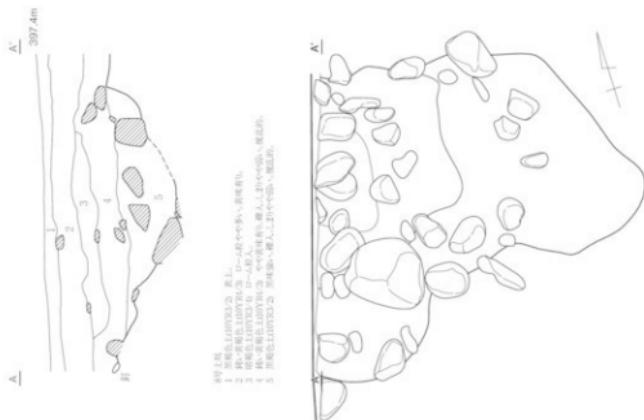




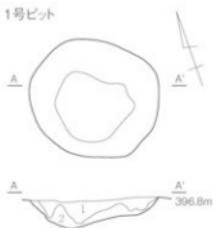
第2図 1~7号土坑

0 (1:30) 1m

8号土坑



1号ピット



1号ピット
1 黒褐色土(1)HYE3-0 厚さ3.5cmの黒色(?)小層入り。
やや堅硬有り、少々軟化。
2 淡い黄褐色土(2)HYE1-0 地山(?)上を走り、少し軟化。

2号ピット



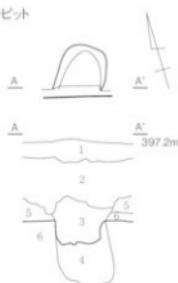
2号ピット
1 黒褐色土(1)HYE3-0 ローム粒混入、やや堅硬有り、少し軟化。
2 黄褐色土(2)HYE1-0 ローム粒混入、地山(?)同質、少し軟化。

3号ピット



3号ピット
1 黒褐色土(1)HYE3-0 ローム粒混入小プロック入り、
やや堅硬有り、少し軟化。
2 黄褐色土(2)HYE1-0 ローム土主張。

4号ピット



4号ピット
1 黄褐色土(1)HYE3-0 表土、耕作土、やや灰黑色味有り。
2 黑褐色土(2)HYE3-0 ローム粒混入プロック多く、地山(?)上を走り、少し軟化。
3 黑褐色土(3)HYE3-0 (薄)白(?)打上、開削有り、やや軟化有り、ローム粒-ローム小プロック入り。
4 黑褐色土(4)HYE3-0 (薄)白(?)打上、開削有り、ローム粒混入。
5 黄褐色土(5)HYE1-0 地山、ローム土主張。

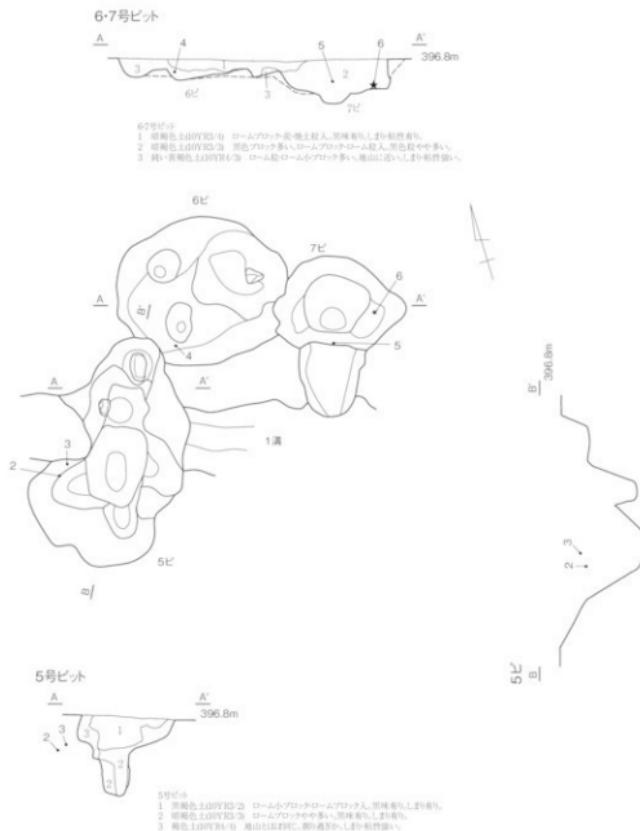
9号ピット



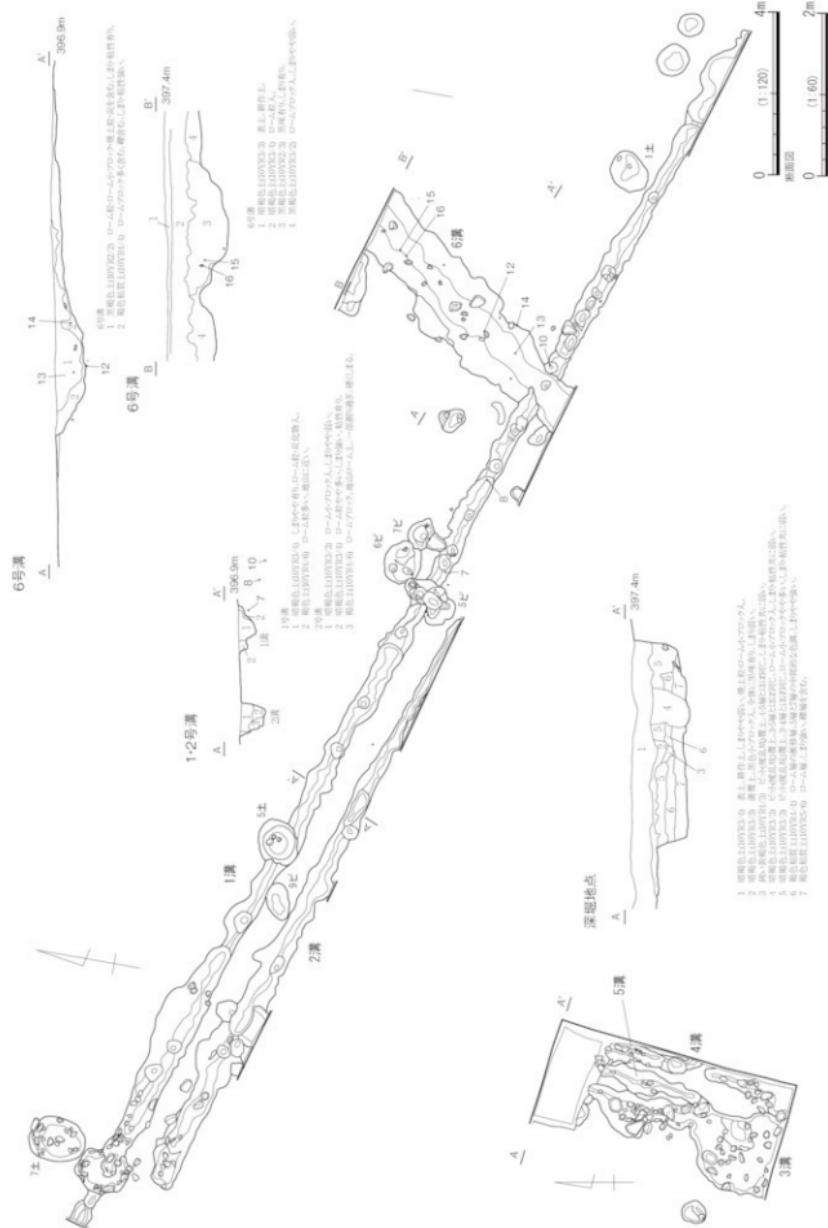
9号ピット
1 黑褐色土(1)HYE3-0 ローム粒混入、地山有り、少し軟化。
2 黄褐色土(2)HYE1-0 地山、ローム土主張。



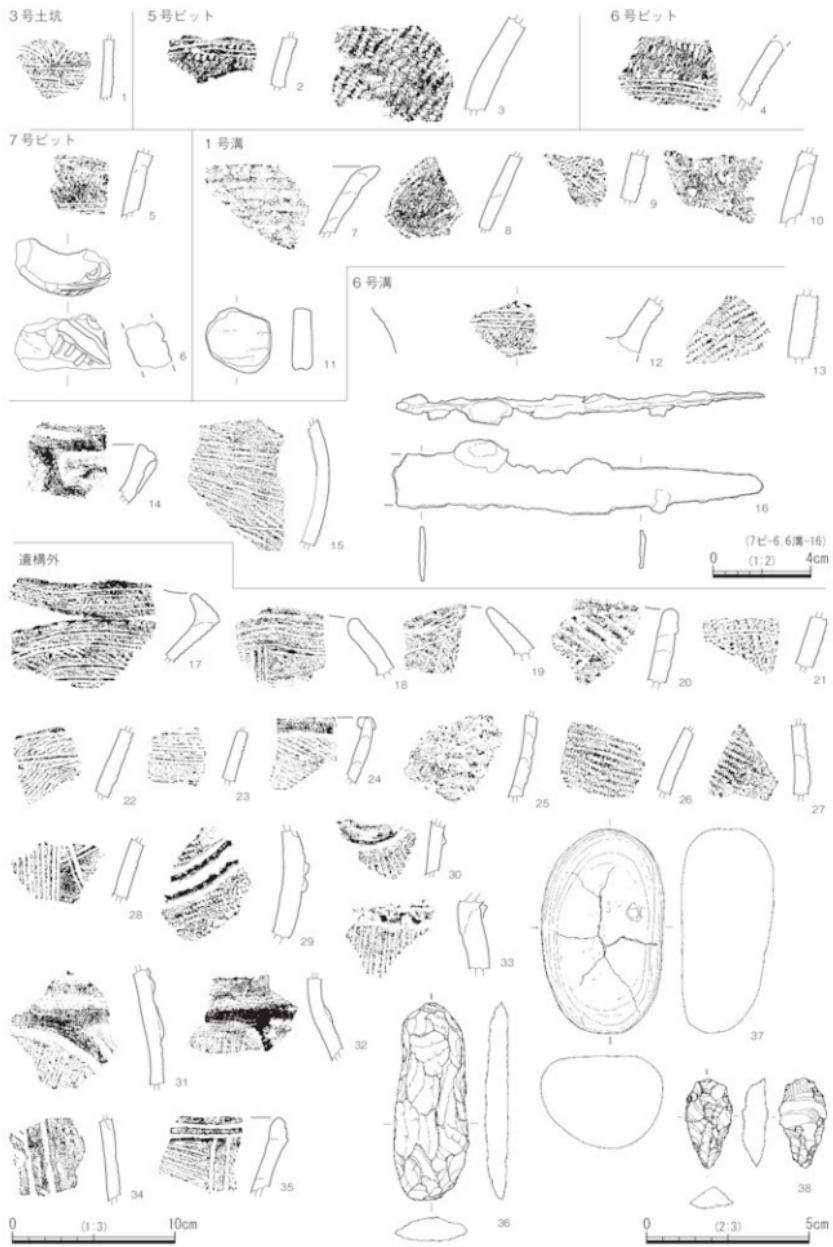
第3図 8号土坑、1~4・9号ピット



第4図 6・7号ビット



第5図 1～6号溝





1 東よりみた遺跡全景



2 真上からの俯瞰写真

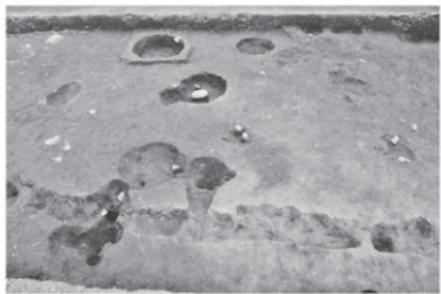
図版 2



1 作業風景



2 3~5号溝と周辺



3 中央付近の土坑群



4 5・6号土坑付近



5 7・8号土坑付近



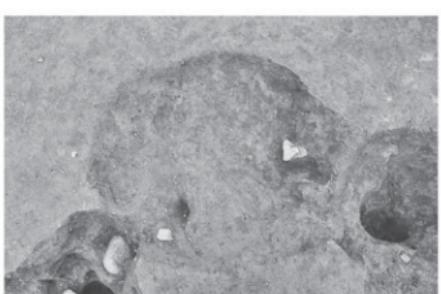
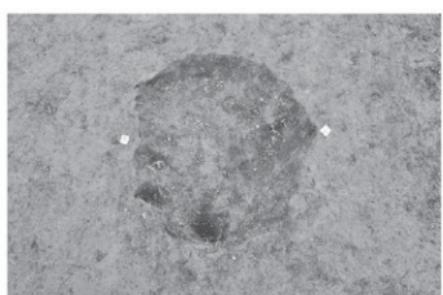
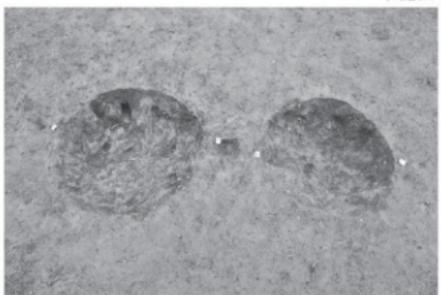
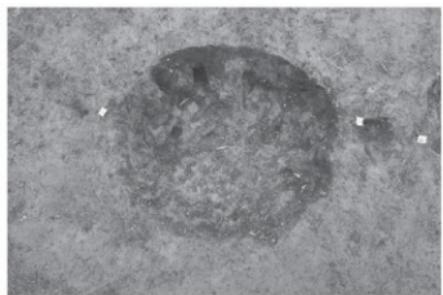
6 1・2号溝(西より)



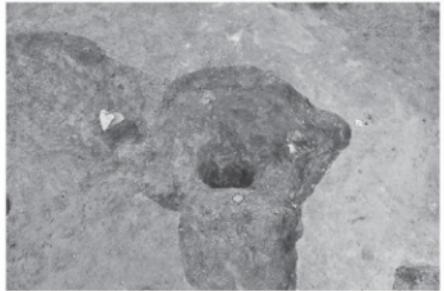
7 完掘状況(東より)



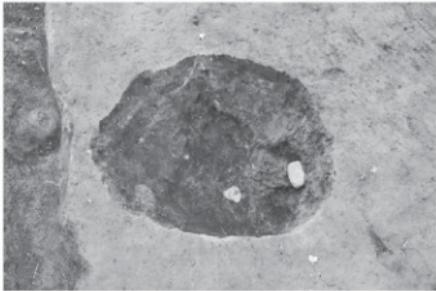
8 図化用写真撮影のためのポール撮影



図版 4



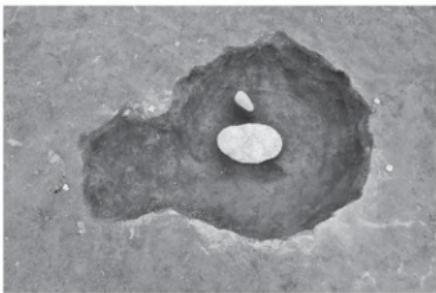
1 7号ピット



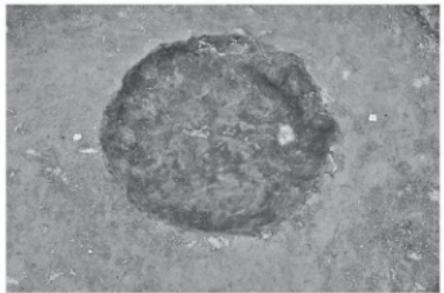
2 1号土坑



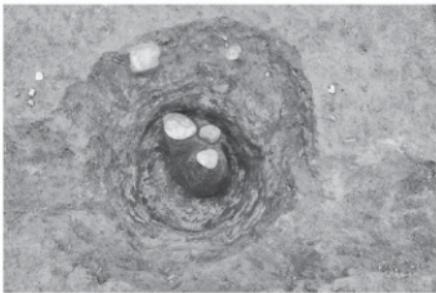
3 2号土坑



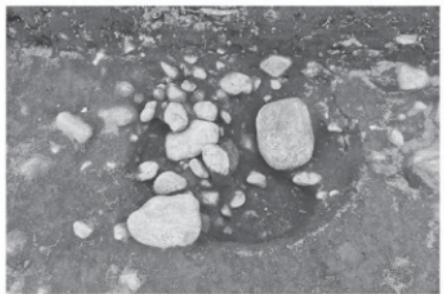
4 3号土坑・8号ピット



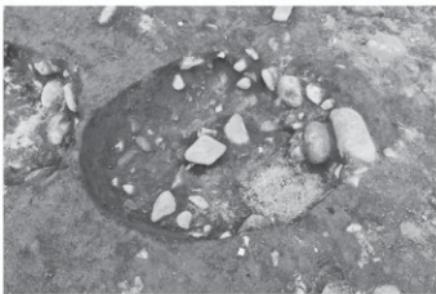
5 4号土坑



6 5号土坑



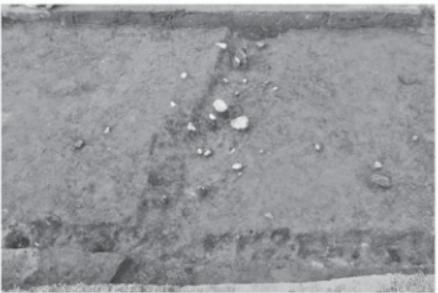
7 6号土坑



8 7号土坑



1 8号土坑



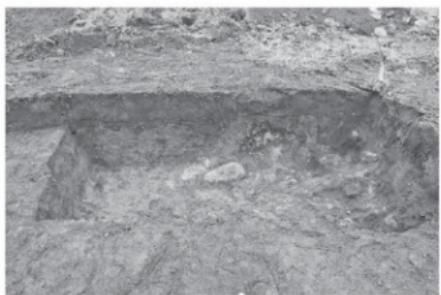
2 6号溝



3 6号溝の断面



4 6号溝内出土刀子



5 深掘地点の断面



6 調査風景

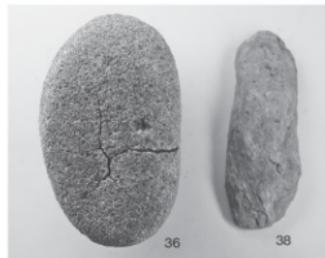


7 作業風景



8 重機による埋戻し

図版 6



出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せんじゅいんまえいせき						
書名	千手院前遺跡						
副書名	宅地分譲地開発に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第23集						
編著者名	鷹原功一						
編集機関	公益財団法人 山梨文化財研究所						
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2 Tel 055-263-6441						
発行年月日	西暦 2017年8月25日						

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'.'''	°'.''''			
せんじゅいん まえいせき 千手院前遺跡	こうしゅうしえんざ んかみしおご 山梨県甲州市塙山上 塙後731	19213	塙-59	35°42'17"	138°42'57"	2016(平成 25)年4月 1~8日	238.7	宅地分譲 地に伴う 進入路建 設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千手院前 遺跡	土坑群・条 里関連	縄文時代前・ 中・後期、 古代～中世	土坑・ピット・ 溝	諸磯b式土器、曾利式 土器、堀之内式土器、 石器、刀子等	特になし

要約	縄文時代前期から後期の遺物および土坑、ピットが検出された。その他、条里地割に関連すると思われる溝が見つかっている。
----	---

甲州市文化財調査報告書 第23集

千手院前遺跡

— 宅地分譲地開発に伴う発掘調査報告書 —

平成29年(2017)8月25日 発行

編 集 公益財團法人山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 TEL 055-263-6441

發 行 甲州市教育委員会・公益財團法人 山梨文化財研究所

印 刷 株式会社帝京サービス
